

---

# 銀の勇者と金の王

柚木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の勇者と金の王

### 【Nコード】

N2764BA

### 【作者名】

柚木

### 【あらすじ】

勇者として召喚されたが女だからというだけで命を狙われているらしい。

協力者の力を借りながらお隣の国に亡命を目指しての逃亡生活。神様の加護で使えるようになった魔法で男の姿になってカモフラージュもばっちり・・・？

文章の練習用に書いてます。読みづらい部分が多いかと思えます。更新頻度もその時の気分に左右されがちです。

それでも生暖かい気持ちでお付き合いくださると嬉しいですよ。  
\*追記\* B Lではありません。

## はじまり

気がついた時にまず目に入ったのは見慣れない天井だった。少し痺れが残る頭を振り、意識を覚醒させ現状を確認する。

少し体に痺れはあるが動けないほどではない。服装は記憶にある通りの喪服代わりの制服。

「確か・・・お墓参りに行って・・・」

そう、私はお墓参りをしていたはずだった。

+ - + + - + - + - + - + - + - + - + - +  
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +

物心ついた頃に両親が事故で他界してしまい、私と兄は母方の祖母に育てられた。

両親がいないことは寂しかったが、祖母の愛情に包まれて十分幸せな日々を送っていた。

しかしそんな些細な幸せも長くは続かなかった。それは私が十歳になってすぐの事。

ある日、忽然と兄が消えた。

祖母が捜索願を出し、自身も必死で兄の行方を探していた。しかし兄は見つからなかった。行方不明になる直前の足取りさえもわからなかった。もちろん私も探したが、やはり兄は見つからなかった。

それから色々であった。

嬉しいことも、悲しいことも。

それらを全部、祖母と差さえあって生きてきた。

兄がいなくなつて七年。

兄の失踪宣言が成立して正式に兄の死亡が認められた。

本当は生きていて欲しい。

でも今のままじゃ前に進めない。

兄を見つけることは諦めていないけれど、それをひとつの区切りとして受け入れた。

「これから新しいスタートだね」と言うと、祖母も少し悲しそうに微笑んだ。

その日の夜、静かに祖母は泣いていた。

それから数日後、祖母が倒れた。

今までもいぶん無理をしてきた祖母。その無理がたまったのだらう。あつという間に祖母は両親の元へと旅立ってしまった。

「翡翠のこと諦めないでね」

最後にそうやさしく微笑んで。

祖母が旅立ってからとはにかく泣いて、泣きはらして、やっと落ち着いた頃にお墓参りに行く決心をした。

小高い海に面した丘にお墓はある。  
季節は春。日差しが心地よい日だった。

きれいにお墓の手入れをして、ふうと空を仰ぐ。

春とはいえお墓の手入れは重労働で、うっすらと汗が滲んでいた。

ざああっ

心地よい風が吹き抜けた。

海に面したこの場所は風の通り道になっている。

風がない穏やかな日だったけれど、この場所は例外なのだ。

ふと違和感を感じて視線をあげると、太陽がその輝きを増したように見えた。

そして次の瞬間、ありえない突風に襲われた。

地面から足が離れる浮遊感。

白く霞む視界。

ずきずきと激しく頭が痛む。

わけがわからなくて、痛みで思考も麻痺してきて。

ふと人の声が聞こえた気がしたけれど、その言葉を理解することもできなかった。

理解しようという気すら起こらないほど思考は麻痺していた。

## 召喚された少女

そして今のこの状況に至る。

周りを見回してみても見覚えがない場所だ。

それどころかなんだか高そうなアンティーク調の家具が並んでいた。

あの突風に飛ばされて気を失ったところを通りかかった裕福な人にも助けられたといったところだろうか。

落ち着かないし早めに家主にお礼をいって失礼しようかと思案していると、コンコンと控えめなノックの音がした。

「お目覚めですか？」

「あ、はいっ」

「では少々失礼してもよろしいですか？」

「もちろんですっ」

とっさのことで思わず声が上がったがそれが仕方のないぐらいの美声だ。

慌てて佇まいを正して声の主が入ってくるのを待つ。

「ご気分はいかがですか？」

ゆっくりと静かに部屋に入ってきたのは、流れるような蒼の髪が印象的な青年だった。

しかしいわゆる美形と呼ばれる人種である青年は、白いローブとい

う奇妙な服装だ。

そもそも髪が蒼という時点で奇妙すぎる。

いくら日本人の顔のつくりとはかけ離れた外人さんだからといって天然で蒼い髪というのは聞いたことがない。

これはちよつとオタクな友人が言っていたコスプレ趣味の残念な美形というやつだろうか。

それはさておき、助けてくれたことに間違いはないだろう。

「えっと、ちよつと痺れたような感覚はありますが大丈夫です。助けていただいてありがとうございます」

私がそう言うと、彼は髪と同じ蒼の瞳を細めて微笑んだ。すべてを見透かされているような気分にさせる、そんな瞳だった。

「少しだけ失礼しますね」

彼はそう言って私の右手をとる。

かあつと顔に熱が集まるのがわかった。

しかしそれも次の瞬間消えてなくなつたのだが。

私の手に重ねた彼の手を中心に、淡い光が溢れた。

私はその光景をただ呆然と眺めるしかできなかつた。

「いかがですか？」

そうやって彼が手を離して、やっと正気に引き戻された。

彼の言葉の意味が分からずに首を傾げれば、さっきまで動かすたびに感じた痺れが消えていた。

「・・・痺れが消えました」

「それはよかった」

「ありがとうございます」

未知の出来事に驚きを隠せずに、それでも不思議と怖いと感じることはなくお礼を伝える。

そして少しずつ、感じる違和感が大きくなっていく。

手から光が生まれて体の痺れが消える。

そんな治療方法を私は知らない。

チラチラと頭を過ぎるのは少々オタクな友人と付き合いで一緒にプレイしたゲーム。

剣や魔法が出てくるファンタジーものだ。

つうと背中を冷たいものが伝う。

目の前の青年も残念な格好の美形な外人さんなどではなく、これが普通なのだとしたら？

残念なのは私の頭のほうではないだろうか。

「申し訳ありません。すべてはこちらが悪いのです」

そう言つて青年は膝をつき、頭をさげた。

何だか嫌な予感しかしない。

ぎゅ、と手に力を入れて私は彼の言葉を待つ。

「すでにお気づきかもしれませんが、ここは貴方のいらした世界ではありません。いわゆる異世界という場所にあるアルメイサンとい

う名の国です」

膝をつき、頭を下げたままの彼が苦しそうに告げる。表情は見えないが、その言葉に嘘は感じられない。

「……………」

そんなことすぐに信じられるわけもない。でもそれが彼の狂言だと断言できないのも事実。

「あの、さっきの光は……………」

「あれはリヒトの加護による治癒魔法です」

「魔法ですか…………私のいた場所には魔法なんてありませんでした」魔法なんて、私の暮らしていた世界にはなかった。

でも現にその魔法を目の当たりにして、その効果も実感してしまっ

た。あれは手の込んだ手品でこれがドッキリだといえないこともないが、そもそも私にこんな大掛かりなドッキリを仕掛けて誰にメリットがあるというのか。

「そうですね…………この世界でも魔法が使える人間は少数です。それについては後ほどご説明しましょう」

「はい」

「それでは遅くなりましたが…………。私はこの国の神官長を務めているアルファルドと申します。アルとお呼びください」

「私は葉山瑠璃といいます。瑠璃、が名前です。よろしく願います、アルさん」

慌てて名乗り、ベッドに座ったままだったがペコリと頭を下げる。するとアルさんは少し困ったように笑う。

「私のことはアル、と。貴方は勇者様なのですから」

「は……?」

ユウシャ……?

今アルさんは勇者と言った気がしたがきつと聞き間違いだろう。私が勇者だなんてありえない。

ちよつとオタクの友人に見せてもらった本にこんな設定の話のものがあつたが、それはすべて作り物であり娯楽用。

実際に自分がその立場にならないから楽しめるのだ。

それでもあの友人なら自分の身に降りかかったとしても、小躍りして喜んだりするのだろうか。

## 理不尽な理由

「何かの間違いでは？」

「貴方が勇者であることは間違いありません。我々が信仰するリヒトによってこの世界に召喚されたのですから」

一応間違いがないか確認してみがやはりきっぱりと否定されてしまった。

ゆるりと首を振って否定するアルさんの顔は、とても悲しそうだった。

ああ彼は本当のことを言っている、まだ彼のことを完全に信用したわけではないのにそう確信する。

何故だかわからないけど、すべてが嘘偽りのない本当のことなんだと。

「しかし、貴方はリヒトだけでなくモンドの加護も厚いようです」

「あの、そのリヒトとモンドというのは？」

「説明不足で申し訳ありません。リヒトは我々の信仰する光の神であり、モンドはリヒトの眷属にあたる月の神です。その髪の色がモンドの加護を受けている証でもあります」

「髪の色、ですか？」

言われてそれなりに長く伸ばしている髪を人房つまむ。

「え……何コレ……」

一度も染めたことのない私の黒髪は、見事な銀髪になっていた。引っ張ってみても抜けることはなく髪を引っ張られた痛みもあり、やはり自分の髪に間違いはない。

「私の髪は黒でこんな色じゃ・・・」

「黒、ですか？確信はありませんが、恐らくこの世界に召喚された際にモンドの加護を厚く受けて変化したのだと思います」

ただただ呆然とするしかできなかつた。

そしてアルさんがそんな私にトドメをさすような一言を告げる。

「貴方は勇者様で神に遣わされた尊いお方です。しかしアルメイサンは王は貴方を亡き者にしようとしています」

「な、ぜ・・・ですか？」

「貴方が女性だからです」

意味がわからない。

突然勇者で神に召喚されてこの世界にきただとか、神様の加護とやらで髪が銀髪になったとか。

おまけに尊い存在だというのに王様に命を狙われている？しかもそれが私が女だからという理由だけで。

突拍子もないことで、言葉も出ない。

「過去の勇者様が男だったというだけで女性の勇者はありあえないと短絡的とらえるような愚かな王なのです」

青の瞳は悲しそうに伏せられて、「申し訳ありません」と呟く彼に  
なんとさえばいいのかわからなかった。

好きでここにいるわけではないのに。

望んで勇者といわれる存在になつたわけではないのに。

まだ兄を見つけれられていないのに。

それはあまりにも理不尽で悔しくて、そして恐ろしくて。  
ぼたりと涙がこぼれた。

「私は貴方をあの愚王の好きにさせるつもりはありません。しかし  
今の私にあの愚王を止めることができないのも事実です」

そう言ったアルさんの声は先ほどまでの穏やかな声とは違つ、意思  
の強そうなものだった。

「ちょうど今日は満月でモンドの加護の強い日でもあります。ここ  
から逃げるには都合のよい日です」

「逃げる……?」

その言葉に顔を上げれば、アルさんはくつと口角を上げて手を差し  
出す。

「貴方は私にとってもこの国にとっても大切な方。時期が来るまであの愚王の手の届かない隣国に身を隠したほうが安全でしょう」

その言葉にどきりとした。

信仰するリヒトに召喚された勇者だからということなのだろうか、『私にとって大切な人』といわれれば誰だってどきりとするんじゃないだろうか。

ましてやアルさんは私には免疫のない美形なのだ。

それをごまかすように慌てて言葉を返す。

「隣国、ですか？」

「はい、アルメイサンの隣にはモンドの信仰が盛んなアルデバランという国があります。以前は荒れていましたが今はとても治安もよく、モンドの加護の厚い貴方が身を寄せるには最適の国でしょう」

時期というのがいつなのか、どういう状態の時なのかは分からない。でも私にこの国の知識など全くなく、生活する術もない。結局アルさんの言葉に従う以外に道などないのだけれど。

ふう、とため息が零れる。

「モンド・・・月の神様なんですよね」

ゆっくりとベッドから降りて立ち上がり、月光の差し込む窓辺に立つ。

窓から見上げた月はもといた世界と同じようで、でも比べ物にならないほど美しかった。

「つつ！」

違和感を感じて息が詰まる。  
頭に凄まじい勢いで何かが流れていく。

「ルリ様！？」

そんな私をみてアルさんが慌ててこちらに駆け寄る。  
違和感はすぐに消え、私はアルさんに振り返ってにっこりと笑う。

「大丈夫です。ただ月の女神様が、少し魔法の使い方を見せてくれたみたいですよ」

「モンドが・・・？」

「はい、たとえばこんな風に」

先ほど一気に頭に流れ込んできた知識。  
それを思い浮かべながらすっと右手を自分に翳す。

光に包まれ、そして体が変化する違和感。

「ルリさ・・・ま・・・？」

アルさんが驚きを隠さずに、私をみて呆然としたように名前を呼ぶ。  
私はそんなアルさんの反応をみて頷く。  
辺りに鏡もなく窓は磨りガラスで自分の姿を確認できていないが、  
ちゃんと魔法は使え、成功したらしい。

少しだけ高くなった目線に違和感を感じるけれど、ヒールを履いていると思えばその程度でしかない。

体には多少違和感を感じるけれどそれもじきに慣れるだろう。

「どうです？これなら見つからないと思いませんか？」

にっこりと笑ってそういう私は、完全に男の姿になっていた。

ちなみに服装は制服のままだったが、女子の制服ではなく男子の制服へと変化していた。

さすがにスカートだと変態っぽいのでそれはよかったと思う。

でも男子の制服ということは服装は私のイメージから変化したということだろう。

どうやらこの魔法は使用者のイメージに強く影響を受けることに間違いないようで、頭に浮かんだ魔法の知識は間違っていないようだ。

## 旅の同行者

「魔法なんて空想の世界のものだとばかり思っていました」

「貴方はリヒトとモンドの加護を受けるお方ですから魔法は使えるだろうとは思っていましたが・・・まさかそんな・・・」

「男になるなんて？」

アルさんの言葉に自嘲の笑みがこぼれる。

幼いころ魔法が使えたらどんなにすばらしいだろうと憧れたこともある。

正義のヒーローみたいに悪者をやっつけたり、シンデレラのように魔法でお姫様に変身するとか。

まさか本当に自分に魔法が仕えるようになって、最初に使う魔法が『男になる魔法』だとは思いつかなかったけれど。

「女神様はかなり私に過保護なようです」

「確かに、モンドは月の女神だといわれていますが・・・まだそれはお伝えしていないのに何故それを？」

「今月の光を浴びたときに、一気に魔法の知識が頭に流れ込んできました。そして綺麗な女の人の姿も」

一度流れ込んできた知識は到底すぐ覚えられるようなものではなかったのだが、使いたい魔法を思えばその魔法が頭に浮かぶという感じでチート感満載だ。

ただそれはモンドに関する魔法のみで、残念ながらリヒトに関する魔法の知識は皆無らしい。命がかかっているというのになんとも中途半端なチートだが。

私の言葉を聴いてアルさんは目を伏せ、静かに息をつく。

そして視線を私に戻したアルさんの目には強い意志の色がみえた。魔法で男の姿になってるとはいえ中身は元の女子高生なままな私が盛大にときめいてしまっても仕方ないことだろう。

アルさんは周りの友人たちが騒いでいたアイドルが比喩物にならないほどの美形で、その意思の強そうな瞳で見つめられているのだから。

「その姿は身を隠すには都合がよいですね。とても可愛らしかったので少々残念な気がします」

「へっ？」

アルさんの言葉に顔に熱が集まるのが分かる。

きっと彼は特別な意味で言ったのではないだろうが、こちらは美形にもそんな言葉にも免疫がないのだ。

真っ赤になっているであろう私をみて、再び先ほどまでと同じ優しい笑みを浮かべるアルさん。

今私は男になっているのだからちょっと引かれているんじゃないかと心配にもなる。

その時コンコンと扉がノックされ、アルさんがちらりと扉を一瞥してからこちらに向き直った。

「こちらの世界に来たばかりの貴方を一人で送り出すわけにもいかないのです、貴方の意見も聞かずこちらで勝手に同行者を決めてしま

いました」

「あ、いえ。そのほうがありがたいです」

「シヤムス、入ってください」

アルさんが再び扉を振り返り声をかけると、「失礼します」と控えめな声が聞こえて一人の青年が部屋へと入ってきた。

「彼はシヤムス。貴方の護衛を兼ねた同行者です」

「シヤムスと申します。どうぞよろしくお願い致します、勇者様」

シヤムスと名乗った青年は、アルさんとは別のタイプの美形だった。柔らかそうな金の髪にすしきつめの紫の瞳。

アルさんが綺麗といわれるタイプの美形ならシヤムスさんは格好良いといわれるタイプの美形だ。

こんな美形と一緒に過ごすのは落ち着かなくて、心臓に悪そうな気すらする。

まあ今の自分は男なのだから毎回赤くなったりしていたらさぞ気持ち悪がられるだろうが。

「シヤムス、こちらはル「ラピス」です。よろしく申し上げます」  
「は？」

アルさんの声を遮って名乗る。

思いつきり偽名だが、(そんなに良くはない頭でだが)ちゃんと考えてのことだ。

「私のもとの世界の名前では目立ちそうなので・・・この名前のほ

うが違和感が少ないかと思ったのですが」

「確かに……そちらの名前の響きのほうがこちらの世界の名前に近いですが……」

「隠れるには少しでも目立つ要素を減らしたいのです。この髪だけでかなり目立つきもしますけどね」

髪を指にくるりと巻きつけ、男の姿になり髪が短くなっていることに気づき苦笑がもれる。

髪も私のイメージに添うように短く変化したらしい。

そんな私たちのやり取りを、シャムスさんはただ静かに眺めていた。よく友人に「瑠璃の話し方は女の子っぽくないよね」と言われていたのだが、それがこんなふうな役にたつ時がくるなんて人生何があるかわからない。

一緒に暮らしていたのが祖母だったからか、口調は大人びていてよく言われたし周りの大人の顔色を伺うことも多かった為、周りの子達と口調が違うのは自覚している。

友人が私の口調を矯正しようとした事があつたが、「ごめん私が悪かった」と何故か誤られた。

「アル、神殿の外に人の気配がある。急いだほうがいい」

ふとシャムスさんが顔を窓の外へ向けてそう告げた。

びくり、と体が震える。

「ラピス様、思っていた以上に時間がないようです。シャムス、ラピス様を頼みます」

「ああ、わかっている。ラピス様、こちらへ」

「はい、シャムスさん」

シャムスさんに促され、アルさんに背中を押される形で部屋をでる。出た所でシャムスさんが振り返る。

「今後は旅の連れということで、お互いに敬語などは一切なしでお願い致します。申し訳ありませんが、銀髪はこの国では目立ちますので」

「わかりました・・・いや、わかった」

シャムス、の言葉に頷く。

そんな私を見てシャムスはふつと微笑む。

「私は正面にいるお客様の出迎えに行かなくてはいけませんのでここでお別れですね」

「アルさ・・・いやアル、ありがとう」

「・・・ラピス、俺達は別の場所から出るぞ」

私の言葉にアルはふわりと微笑んで、すつと背筋を伸ばして歩き出す。

その背中を見送り、シャムスに連れられアルとは反対方向にある別の小さな部屋へ入った。

部屋に明かりはなく、しかし部屋の中心にある台座に置かれた水晶のような石がかすかな光を放っていた。

それはとても幻想的な光で思わず見とれてしまう。

「アルが用意した転移用の宝珠だ。急ごう」

シヤムスに手を引かれ台座の前に移動する。

男になって手も多少大きくなっていたが、シヤムスの手はそれより大きくて逞しかった。

繋がれている手とは反対の自分の手をみる。

男になったとはいってもこんな手で身が守れるんだろうかと不安になった。

「いくぞ」

その声に慌てて顔を向ければ、シヤムスが宝珠に触れすつと目を細めた。

何か暖かいものが緩やかに流れてシヤムスの手に集まっていく感覚。

これはシヤムスの魔力の流れなんだと判る。

その魔力に反応して宝珠の輝きが増し、そして部屋に光が溢れた。

+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +  
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +

光が収まって目を開くと、そこは木々に囲まれた場所だった。

「近くに街がある。今日はそこで宿を取ろう」

「わかった」

シャムスが辺りを警戒しつつ歩き出す。  
遅れないように少し急いで足を踏み出した。

「う……気持ち悪……」

突如ぐらりと視界が歪み、体が傾くのがわかったがどうすることもできない。

しかしすぐにシャムスが支えてくれたので、地面と抱き合うようなことにはならずすんだ。

シャムスがじつとこちらを覗き込むのを気配で感じる。

「魔力酔いだな」

魔力酔い？なにそれ……と聞きたいが話すのも辛い。

「魔力に触れたことがない者や耐性のない者などがなるんだが……  
そうか、お前魔力は高いが異世界の人間だったな。魔力に触れたことがなかったのなら仕方がない。じきに治まるからそれまで辛抱してくれ」

そう言つてシャムスは少しだけ身を屈めて、私を担ぎ上げた。

それはいわゆる『俵担ぎ』だった。

いや、決してお姫様抱っこして欲しかったわけではないのだけれど。  
ただ、この担がれ方は……胃が圧迫されて余計に気持ちが悪い。

「つつ、悪い」

相当顔色が悪かったのか、すぐに気づいてもらえて背中に負ぶってもらった形となった。

さすがに見た目だけとはいえ男同士なのでお姫様抱っこは回避されたようだ。

結局近くにあるという街までずっとシャムスに負ぶって連れて行ってもらった。

最初から文字通りおんぶに抱っこで申し訳なさをきる。

## 怖い夢

街に到着したのは深夜だったがファンタジーの世界らしく冒険者というものが存在し、深夜でも宿を求める客が来るといのは良くある事らしくすんなりと宿に入ることができた。

深夜だが街の中にはポツポツと人通りがあった。

まだ気持ち悪さは残っていたが動けないほどではなかったので、シヤムスの背中から街の様子を眺めていたところ、冒険者をチラホラと見かけたのだ。

いかにもゲームの世界の住人というような格好をした・・・剣や杖などをもった人達を見かけた。

シヤムスも帯剣していたのだが美形すぎてあまり実感が沸かなかつたのもある。

思わず興奮気味に反応してしまったのは仕方ないことだと思う。

少し前までは空想の存在でしかなかった人やものが目の前に存在しているのだから。

そしてアルやシヤムスのような美形ばかりの世界でないこともわかって少しほっとした。

美形しかいない世界なら私のような凡人はさぞかし悪目立ちしてしまっただろうと。

これならば髪を隠すだけで、私は人の森の中に溶け込んでしまえそうだった。

宿の部屋へと入るとシヤムスは一通り部屋を確認するように見回してから私をベッドへと降ろし、さらに持っていた荷物を降ろした。それなりに重そうな荷物にさらに私という荷物まで担がせてしまっ

て本当に申し訳ない。

「ありがとうシャムス。迷惑かけてごめん」

「いや、元の世界に魔法が無い勇者が最初に魔法に触れたときに魔力酔いを起こしたという話は聞いたことがある。それを考慮に入らずにいたこちらの不注意で辛い思いをさせてすまなかった」

感謝と謝罪の言葉を告げれば、逆にこっちが誤られてしまう。

やはりその言葉に嘘はないんだと感じる。どうやらこれもモンドの加護の力らしい。

ああこれは本当なんだ、と不思議とそう感じるのだ。

それからモソモソと外套をはずし、ベッドサイドにあつた椅子の背にかける。

同じように外套を外して軽装となったシャムスが荷物から服を一式取り出した。

「とりあえずはこの服を着て、明日ラピスの服を買いに行こう。今のままでは目立ちすぎるしかといって俺の服ではサイズが合わない」

「うん、そうだね・・・」

男の姿となつて多少身長は伸びているが違和感の少ない程度で恐らく男としては背が低いだらうと思う。

それに比べてシャムスは私より十センチ以上は背が高い。

服を広げてあててみても、やはり腕も足もしっかり余ってしまうサイズだった。

「今日はもう休め。シャワーも浴びられるようなら浴びておくとい

い。明日以降は状況次第で野宿になることもある」

「ん、そうだね」

野宿・・・さすがにその経験は無い。

しかもここは異世界で、今の自分は命を狙われている状況で。

冒険者がいるのだからゲームの世界のようにモンスターがいると思  
ったほうがいいだろう。

怖い。

その不安を誤魔化すようにシャワーを浴びた。

流れ落ちるお湯と一緒に不安も少しずつ流れていくように。

シャワーがお湯であることに感動しつつ。

「ラピス、タオルを渡すのを忘れていた」

がちやり、扉を開きシャムスが顔を覗かせた。

シャワーだけが設置されたこの場所に脱衣所などというものは無く、  
扉の上のほうに籠が置いてあるだけのものだ。

恐らく風呂やシャワーは日本でいえばいわゆる大浴場のような場所  
で済ませるのが普通で各部屋についているのは簡易的なもの、しか  
もそれでも多少いい宿でなければ設備されていないようなそんな雰  
囲気だ。

「う、うきゃあああ!？」

変な声がでた。

「ラピス!？」

「と、とりあえずタオル置いて外出て！」

「え？ああ・・・」

見られた、みられた、ミラレタ。

扉に背を向けていたからお尻ぐらいしか見られていないだろうけど見られたものは見られた。

ぐるぐると取り留めない思考が頭を駆け巡る。

少し落ち着こうと深呼吸をして視線が下を向いたときにソレを目にした。

「つつっ！」

本来ならあるはずの無いものがそこにはあった。

落ち着いて考えれば今の私は男なのだからあって当然ですぐわかりそうなことなのだが、その時はいろいろなことが一度にありすぎてすっかり忘れていたといえなかつたか。

生まれて初めて目撃してしまったソレにさらに思考は混乱し、ふらふらとよろめいた拍子に壁にごつんと頭をぶつけてしまった。

「・・・痛い」

情けないにもほどがある、と他人事のように考えながら意識を手放した。

目が覚めたら全部夢だったりするのだろうか。

ふわふわとおぼつかない足元が今は心地よかつた。

きっとこれは夢。

異世界に召喚されたり男になったりというのも怖い夢だったのだらう。

今はちゃんといつも通り女で髪だって黒い。

ふと見れば目の前にはやっぱり現実離れた美しい女性が立っているが、これは夢なのだから何でもありだろうとふらふら近づいてみる。

「こんにちは」

へらり、と笑って声をかけると美人さんもにっこりと笑う。

無性に嬉しくなってさらに頬が緩んだ。美人さんの言葉を聞くまでは。

「さっき教えるのを忘れていたことがあるの」

「さっき？」

前に会ったことがあっただろか、と思い返してみるが思い当たることもなく首を傾げる。

「私の加護は新月の時はとても弱くなってしまうの。魔法もほとんど使えなくなるから気をつけてね」

「え・・・？」

「でも貴方にはリヒトの加護もあるし大丈夫。リヒトの加護はどこにでも届くから」

一応伝えておきたかったの、と美人さんは微笑んで景色に溶けるように消えてしまった。

リヒト、と彼女は言っていた。

ずっと血の気が引くのがわかった。

気がつけば髪も銀色で体も男の人のそれだ。

あの怖い夢は夢じゃない？

それともこれを含めたすべてが夢？

再び思考の渦に飲まれながらも、モンドはやっぱり美人さんだったな、と考えている呑気な自分もいた。

**自責と決意（前書き）**

今回はシャムス目線です。

## 自責と決意

side シヤムス

ラピスをシャワールームへと送り出した俺は、小さく息をつく。

ここまでは順調。

ラピスが魔力酔いを起こしたのは想定外だったがたいした問題でもない。

あの目立つ服装は明日目立たないものを買えば問題ないだろう。

今のところ追っ手の姿は見えないが油断はできない。

ラピスだけでなく、俺もあの愚王に追われているのだから。

ふと部屋の隅の籠にタオルが置かれたままであることに気づく。

そこでラピスにタオルを渡し忘れたことに気づき、脱衣所も無いのでしかたなく直接タオルを渡そうと特に気にすることなくシャワールームの扉を少し開け声をかけた。

何故だか慌てた様子のラピスに外に出るように言われたために、タオルを持ったまま扉の外で壁に寄りかかりラピスを待つ。

しかしその直後に何かをぶつけたような音が中から聞こえた。

「ラピス、どうした!？」

慌てて声をかけるが返事は無い。

ラピス以外の人の気配もなく魔力も感じないので襲撃はないだろうと思っていた。

俺に気配も気づかれないほどの使い手の追っ手が来たということだ  
ってありうる。

舌打ちし、シャワールームに飛び込んだ。

目に入ったのは壁に頭を打ち付けてずると崩れ落ちるラピス。  
やはりラピス以外の気配も魔力もなく、どうやら自分で頭をぶつけ  
ただけのようだった。

しかし今更になって気づく。

さっきまで魔力酔いであれだけぐったりしていたのだ。

また気分が悪くなったのかもしれない。

急いで手にしていたタオルでラピスを包み、抱き上げベッドへと運  
ぶ。

途中でも思ったことだが、ラピスは線が細いがその見た目以上に軽  
い。

こんな状態で無事アルデバランまでたどり着けるのかと心配になる  
が、彼を無事に送り届けることが自分の使命なのだと己を叱咤する。  
とりあえずいつまでもタオルで包んだままでは風邪を引いてしまっ  
たろうと、先ほどラピスに手渡した服を着せようと抱き起こす。

「・・・・・・・・」

ちょうどそこで気がついたラピスと目が合った。

「気づいたか」

「う、きゅおおおお!?」

ラピスは再び奇妙な悲鳴を上げ俺の手から逃れ、布団を頭からすっ

ぼりと被り隠れてしまった。  
なんなのだろう、この反応は。

「ラピス？」

少し訝しげに声をかければ、ラピスははっとした様子で布団から顔だけだしてこちらを見た。

「ごめん、その、あまり人に裸を見られるのは慣れていなくて」

「同性でもか？」

「あー、うん」

少し間があったように感じられるが、同性同士でも信仰する神の教えからあまり肌を見せ合わないようにするという人々がいると聞いたこともある。

恐らくラピスもそういう類のものなのだろう。

そもそもラピスは異世界の人間だというのだから、俺が想像もつかないような習慣があっても不思議ではない。

「考慮が足りず、悪かった」

謝罪し、頭を下げれば慌てたようなラピスの声。

「違うんだ、シラムスは悪くない。むしろ私を助けてくれて感謝してる。・・・服着るから少し向こうを向いていてくれるかな」

こちらに身の乗り出すような姿勢になり再び布団から上半身がでてしまう形となったラピスは、がっくりと肩を落とし頂垂れた。

今回は悲鳴は上げられなかったがなにやら落ち込んだような様子で、やはり俺に肌を見られたせいなのだろうなと思う。次からはできるだけ気をつけるようにしよう。

「ごめん、もういいよ」

声をかけられ向き直れば、俺の服を着て申し訳なさそうにこちらを見て立っているラピス。

手足を折り曲げてなんとか動きやすくしているが、やはり服が大きすぎて服に着られている感が否めない。

それにしても男だというのに庇護欲がそそられるのは何故なのか。

一見女かと思紛う様な外見であるが、先ほど男だと痛感した。

ラピスのあの様子では見てしまったとは決して言えないが。

「色々あって疲れているだろう、今日はもう休んだほうがいい」

「・・・そうだね」

俺の言葉に頷くラピスの瞳に寂しそうな色が浮かぶ。

しかしその色もすぐに隠れ、ラピスはベッドに横になりすぐに寝息を立て始めた。

やはりかなり疲れていたようだ。無理もない。

ラピスは傷一つ無いきれいな体をしていた。手も剣など握ったことのない手だった。

それはつまり戦う必要のない場所にいたということ。

今まで命の危険を感じるようなことはない生活を送っていたのだろう。

俺も明日に備えて横になる。

警戒は怠るつもりはないが、休めるときに休む事は重要なのだ。

しばらくして、人の気配で目が覚めた。

起き上がることはせず視線だけで確認すると、月明かりの差し込む窓辺でラピスが月を見上げていた。

こちらに背中を向けているのでその表情はわからないが、きっとあの寂しそうな目をしているのだろう。

チクリ、と心が痛む。そんな表情をさせているのは俺やこの国なのだから。

この世界に召喚されてしまった原因は間違いなくこの国アルメイサんだ。

本来ならば俺やアル、そしてこの国の人間がやらねばならなかったこと。

しかしすでにこの世界の人間では手が打てないとリヒトが判断したからこそラピスが召喚されたのだ。

それが意味することを俺は知っている。

だからラピスにはとても申し訳ないと思うのだ。

そう遠くないうちにラピスはそのことに気づくだろう。

できる限りラピスの力になろう。

それがこの国の、俺の責任でもあるのだから。

しばらくしてラピスも落ち着いたのか、床に戻り再び眠りについたようだ。

それを確認してから俺もまた眠りについた。

## 勇者の葛藤

目を開けば至近距離にあるシャムスの顔。  
モンドの次はシャムスの幻が見える。

こんな至近距離でシャムスの顔を観察するチャンスなんてほとんどないだろうから、せっかくなのでこの機会にしっかりと観察してみる。

長い睫毛にすらりと通った鼻筋。

意志の強そうな瞳がまっすぐこちらを見つめている。

本当に、ため息の出るほどの美形さんだ。

あまり近くで見すぎると目が溶けてしまいそうなほどの眼福。

・・・どうやら見つめすぎて私の脳のほうが溶けてきているらしい。

「・・・・・・・・」

シャムスと目が合う。

「気づいたか」

「う、きゅおおおおお!？」

シャムスの幻が口を開いた。

ちらり、と視線を下に向ければタオルで包まれて入るが裸の自分。思わず奇声を発した後退り、布団を頭から被り自分に落ち着けと言いつつ聞かせる。

何がどうなっている？

そういえばシャワーを浴びていて諸事情により気を失った気がする。シャムスは倒れた私をここまで運んできてくれただけだろう。

シャワールームで遠のいていった意識は比較的早く戻ってきたようだ。

しかし色々と失ったものは大きい。

それでも今は男なのだからまだマシだと思えばいいだろう。

では自分の行動は？

まじまじと見つめてしまった気はするがおさわりなどはしていないはずだ。

大丈夫、一線は越えていない。変態という一線は。

「ラピス？」

困惑したようなシャムスの声。

シャムスは護衛対象でしかも同性の私を助けてくれたに過ぎない。慌てて布団から頭だけ出してシャムスを見る。

「ごめん、その、あまり人に裸を見られるのは慣れていなくて」

「同性でもか？」

その質問でシャムスは私が本当は女だということを知らないのだと確信する。

（男としての）裸を見られてしまった以上、今更本当は女だとは言えない。

色々と恥ずかしすぎる。それはもう色々。

「あー、うん」

自分を助けてくれている相手に嘘をつくのは良心が痛むけれど、それよりも恥ずかしさが勝った。

その後は何故かと理由も尋ねられることもなく、シャムスに謝罪されてしまった。

そして早く休んだほうがいいと言われ、素直にそれに従った。

シャムスの言うとおり、色々と疲れていたから。

主に精神的に、そのほとんどが自滅とも言つべき事態によって。

こういう時は寝るに限る。

悩んでも答えが出ることのほうが少ないと、祖母がよく言っていた。悩むぐらいなら行動したほうが何倍も有意義だ、と。

横になれば不思議とあっさり睡魔に襲われ眠りに落ちた。

思った以上に疲れていたらしい。

異世界にきたり、勇者といわれたり、実感はないけれど命が狙われているといわれたり。

『起きてー』

初めて魔法を見たり、一つだけだけ魔法を使ったり性別が変わってしまったり、魔力酔いになったり。

『おーきーてー』

見たこともないような美形を二人も見られたけれど、その一人であるシャムスに色々見られたり。

『起きてっば〜』

五月蠅い。

頭に響く声は次第に大きくなって無視できなくなっていた。諦めてベッドから置きだして窓辺へ向かう。

『さつきはルリがすぐに起きちゃってきちんと伝えられなかったから、今こうして声を飛ばしているのにい』

なんだか間延びした話し方だが、これが本来のモンドの話し方のようだ。

『もうすぐ新月の夜が来るから・・・新月の夜は気をつけてね？リヒトの加護はいつも通りでも私の加護はほとんど力を発揮できないのよねえ』

どうして？

そう思い浮かべればモンドにもそれは伝わったようで。

『私はリヒトの光を使って加護を与えているからなのよ。細かく言うとな新月でなくてその前日の朔が一番力が届かないわねえ』

光を媒体にしてる、ということだろうか。

だとしたら曇りや雨などで月の光が届かない日は・・・

『モチロン力は弱まるわあ。それはリヒトも一緒、ただ程度が違うけれど。逆に満月で天気の良い日なら私の力が一番強く影響する

のよお』

要約すると、月が見えない夜は加護の力が落ちるってことだろうか。

『そう思ってもらって問題ないわ。ちなみに次の朔は六日後だから気をつけてねえ?』

そう言われても、実際どういう変化が起きるのかわからないし、ど  
う気をつければいいのかもわからない。

加護が弱くなるということは、魔法も弱くなるということなのだろ  
うけれど。

『朔と新月の日は魔法が全く使えないと思ったほうがいいわね。  
つまり今使っているその魔法も・・・』

それはマズイ。シャムスに女だとばれてしまう。

私の精神衛生上非常にマズイ。

それまでに何か対策を練っておくべきだろう。

わざわざそれを知らせてくれるなんてやっぱりモンドは過保護だと思えば『ふふふ、じゃあまたね』と楽しそうに笑い、それきりモンドの声は途絶えてしまった。

しかしこの電波でやり取りするような会話は傍から見たら相当怪しいだろう。

思わず声を出して答えないように気をつけないと。

ちらりとシャムスに視線を向ければ、やっぱり寝顔も美人さんで、私は涎を垂らした間抜けな寝顔なのにと少し悲しくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2764ba/>

---

銀の勇者と金の王

2012年1月11日01時49分発行